

## ある英国人婦人と反纏足運動

東 田 雅 博

### はじめに

本稿の目的は、時代を一九世紀末葉から二〇世紀初頭に限定して英国と中国双方における社会の有様、そこでの女性の地位、女性と公的領域との関連、そして纏足反対運動をある英国人婦人の人生の軌跡を中心に関連づけてみることである。そうすることによって、英国の帝国・アジアへのインパクトと帝国・アジアの英国へのインパクトをともに視野に収めつつ、母性主義フェミニストでも、母性帝国主義者でもない、また女性版オリエンタリストでもないある女性の姿を提示しようとするものである。

ここで取り上げようとしている英国人女性とは、リトル夫人 Mrs Archibald Little（一八四五—一九二五年）である。この女性は「家庭の天使」が理想とされる時代において、家庭を飛びだし、英国を飛びだし、飛び出した中国で反纏足運動

を組織し、リードした人物なのだが、一般にはほとんど知られていない。彼女の夫リトル (Little, Archibald John : 一八三八—一九〇八年) は、日本の人名辞典でも、初めて汽船で揚子江を遡り、重慶に達した人物として、あるいはその地での成功した実業家として紹介されているそれなりに著名な男性だが、<sup>2</sup>ここで取り上げようとしている、その妻アリシア・リトルはその種の名辞典にも載せられていない。驚くべきことに『英国国民伝記事典』<sup>3</sup>にはリトル夫人はもちろん、リトルも掲載されていない。同時代の英国でもこうした事情はさほど変わらなかったようである。一九一一年に刊行された第一版の『ブリタニカ』には、項目としてはリトルも、リトル夫人も採用されていない。しかし、リトルについては、「揚子江」の項目で彼の揚子江での活躍が紹介されている。<sup>4</sup>リトル夫人については索引にもない。

このようにリトル夫人は、一般にはほとんど知られていない人物だが、反纏足運動の研究者にはよく知られている。一

九一七年に刊行された『エンサイクロペディア・シニカ』（以下「シニカ」と略記）は、リトルについて項目として取り上げ、揚子江での活躍を紹介し、リトル夫人については項目としては採用していないが、反纏足の説明中にリトル夫人の活躍を紹介している。「・・一八九五年に一〇人の国籍の異なるレデイがリトル夫人を会長として天足協会 *natural foot society* を創設した・・この協会はすべての総督や巡撫に請願書や手紙を送り、各地で集会を開き、協会の会長（リトル夫人）が多くの人を聴衆に演説をした・・」<sup>5)</sup> 詳しくは後に述べるが、これ以降反纏足運動に触れた文献は大抵リトル夫人を反纏足運動の中心人物として紹介している。

このようにリトル夫人は、纏足研究の関係者以外にはほとんど知られていないが、近年ようやく少しずつ光が当てられるようになった。これまで次のような研究が刊行されている。エリザベス・クロールの論文は、リトル夫人が著したフィクションとノン・フィクションを史料としたリトル夫人の伝記的研究である。注が全くなく、引用がどの作品からのものなのかわからないという致命的欠陥はあるが、唯一の伝記的研究としての価値はある。クロールによれば、彼女のフィクションは中国におけるヨーロッパ人を主として描いたもので、彼女のノンフィクションは中国人の家庭生活や社会生活に「民俗学的眼差し」を向けたものだといふ。<sup>6)</sup> 一九九六年に刊行された『大英帝国歴史事典』は、リトル夫人を項目として採用し、彼女の作家としての活動や、結婚前のフェミニニ

### 一、一九世紀英国の女性の社会活動

リトル夫人は一九世紀英国の理想の女性像とされる「家庭の天使」という枠に収まるような女性ではなかった。だが、この時代にあつては、女性がリトル夫人のような活躍をすることは容易ではなかった。ここで、この時代に女性が家庭を離れて、何ができたのかについて見ておこう。

まず「家庭の天使」というヴィクトリア時代の理想の女性像について改めてみておく。「家庭の天使」とは、いうまでもなからうが男性が本来活躍すべき領域は公的領域にあるとし、女性の本来の領域は私的な領域にあるとする性別の役割分業を当然視するヴィクトリア時代のジェンダー・イデオロギイの産物である。もちろん実際には、女性たちは、このイデオロギイがほとんど無視していた労働者階級の女性はいうまでもなく、その本来の対象であったミドルクラスの女性も、文字通り家庭内に閉じこめられていたわけではない。

家庭の外での女性の活躍の場は、もっぱら「この時代のミドルクラスのレデイのおきまりの捌け口」とされてきた慈善活動であつたが、次第にその場は拡大した。ある社会史家は、一九世紀の最後の四半世紀は女性の役割についての認識が変化し、男と女の関係の再調整が持続的に行われた時代であつたとして次のようにその様相を描いている。一八七〇—一八九九年の間の地方政府の再構築は、女性に初めて公務員への

ト運動への関わり、中国での反纏足運動を簡潔に紹介している。<sup>7)</sup> また、リトル夫人のフィクションとノン・フィクションの作品を分析したヴィクトリア文学研究者テューリンは、リトル夫人をオリエンタリズムを女性化した人物として、あるいは西欧の男性のオリエンタリズムを批判し、それに代わる女性のオリエンタリズムを提示した人物として評価している。<sup>8)</sup>

註(1) 帝国・植民地の英本国へのインパクトという問題のとりえ方については次が参考になる。J.F. Codell & D.S. Macleod (ed.), *Orientalism Transposed: The Impact of the Clonies on British Culture*, 1998.

(2) リトルについての項目があるのは『岩波 西洋人名辞典』一九八一年、『西洋人物レファレンス事典Ⅱ近世編』（日外アソシエーツ、一九八四年）ぐらいだが、後者の記述はきわめて簡単なものである。

(3) *Dictionary of National Biography*, 1970.

(4) *Encyclopaedia Britannica*, 11th ed., 1911, vol. 26.

(5) *Encyclopaedia Sinica*, 1917, pp. 29-30.

(6) Elisabeth Croll, *Wise Daughters from Foreign Lands*, 1989, pp. 23-62.

(7) J.S. Olson & R. Shadle (eds), *Historical Dictionary of the British Empire*, 1996, pp. 673-675.

(8) Susan Schoenbauer Thurn, *Victorian Travelers & the Opening of China, 1842-1907*, 1999, pp. 163-187.

足掛かりを与え、一八八〇年代の伝染病法への反対闘争は、女性が性的な問題を公の場で話すことは危険で不適切だという因習的観念を打破した。両政党は一八八〇年代に女性組織を立ち上げ、一九世紀後半のイギリスでのアソシエーション文化の巨大な成長は数千の活動的で、組織的な女性たちを疑似的な公的領域に導いた。一八七〇年代以降一連の立法改革と法的決定が漸次女性と母に一定の自律的な法的権利を付与した。富裕さの増大は多くの地域で労働者階級の既婚女性を労働市場から退場させていたが、女性の人口上の余剰の認識の高まりは、一部のミドルクラスの女性に結婚に代わるものを、職業、地位、経済力の形で追求させることになった。<sup>9)</sup>

他方で、帝国の拡大は、女性に海外でも機会を与えた。レデイ・トラベラーとしての活躍はよく知られているところだが、家事使用人として、あるいはガヴァネスとして植民地に渡った女性も多かった。しかしもともと注目すべきなのは女性宣教師としての活躍であろう。女性宣教師たちは、本国での女性の公的な場の拡大に呼応するかのように海外での活躍の場を拡大していった。とくに一九世紀後半以降多くの女性が、男性宣教師の妻として、あるいは娘として、さらに単身の女性宣教師として海外で布教活動に携わったのである。海外での女性宣教師の活躍は、私的領域を本来の活躍の場とされていた女性の活躍する場を公的領域に広げ、女性の公的領域での活躍に途を拓くのにきわめて重要な役割を果たした。<sup>10)</sup>

また、家庭内において、女性がよく言われるようにただ夫に従属し、受動的で、怠惰な生活を送っていたわけではなく、むしろある意味では主導権を握っていたとさえ言える。実際には家庭とその女主人は、男性の商業活動の重要な協力者として役立った。ヴィクトリア時代のミドルクラスの男性は階級問題を管理し、ミドルクラスとしての地位を示威するというイデオロギー的役割を彼の妻に依存した。家庭は一家の社会的地位を演出する舞台であり、その舞台で妻はきわめて重要な役割を果たしたのである。<sup>3)</sup>

だが、「家庭の天使」こそがリトル夫人が属していたヴィクトリア時代のミドルクラスの理想の女性像であったことを、男性たちがこの理想を執拗に追求したことを軽視してはならない。ダイクストラの『倒錯の偶像』は世紀末に、この「家庭の天使」像が、あるいは「家庭の尼僧崇拜」が、その存立を脅かされたとき、とりわけ世紀末に「ニュー・ウーマン」が登場したとき、この理想を金科玉条の如く奉じる男性たちがいかに激しく、戦闘的に、あるいは見苦しいまでに抵抗しようとしたかを見事に描いている。そこに登場する男たちは、決して名もなき男たちではなかった。オーギュスト・コント（社会学者）、ジュール・ミシュレ（歴史家）、チャールズ・デイケンズ（小説家）、ジョン・ラスキン（社会批評家）などなど到底枚挙に暇のないほど多数の、一九世紀という時代にきわめて大きな影響を与えた錚々たる男性たちであった。<sup>4)</sup> 男たちがこれほど「家庭の天使」にこだわるからに

は、リスベクタブルな女性たちが家庭の外で活躍の場を見いだすのは容易ではなかったし、そこで自由に活躍できたわけでもなかった。

ここで問題にすべきは、男性たちが「家庭の天使」という理想に頑ななまでにこだわった時代であったがゆえに、女性が家庭外で活動するにはかなりしつかりした正当化が必要であったという点である。その正当化論は、やや逆説的だが基本的には女性を家庭という閉ざされた領域での専門家として規定することだったと言える。この時代は女性を男性に対して従属的な立場に置きながらも、女性の属性とされた家庭内の様々な才能、性質、使命感については高く評価しようとした。こうした女性特有とされた家庭的能力を家庭外でも生かそうという議論である。こうした正面から男女の平等を訴えるのではなく、むしろ男性が理想とした女性像におもねるような形で女性の社会進出、公的領域への参入を計ろうとする立場を母性主義フェミニズムと呼ぶが、この時代にはこうした立場がフェミニズムの主流であった。<sup>5)</sup>

次に指摘しておかねばならないのは、女性の家庭外での活躍には「男性の指導権」が不可欠であったという点である。家庭外の女性の活動に大きな裁量権が与えられた場合がなかったわけではない。たとえば、ハドソン・テラー率いる中国内地伝道団 China Inland Mission (CIM) の活動である。テラーは、宣教活動において女性を男性と同等の力があることを確信し、この時代にあつては考えられないほどの責任と独

立性を女性に与え、女性宣教師を積極的に動員しようとした。そして、CIM は女性を惹きつけるのに大いに成功したのである。だが、CIM はプロテスタント伝道団の少数派でしかなかった。「海外の女性の仕事は、神の王国の仕事を命じる男性の指導権を十分に認識しなければならない」。このロンドン伝道協会の一八八八年の会議での結論は、プロテスタント伝道団主流派全体の結論でもあった。国教会伝道協会やロンドン伝道協会などの主流派も、女性宣教師の派遣を認めるようになったが、そのことが男性中心の権力構造を揺るがすようなことはなかったのである。<sup>6)</sup> 世俗の場でも事情は大きくは変わらなかったはずである。

註(一) Jose Harris, *Private Lives, Public Spirit: Britain 1870-1914*, 1993, pp.23-26.

(二) ハッパの議論については次を参照。P. Williams, "The Missing Link: The Recruitment of Women Missionaries in some English Evangelical Missionary Societies in the Nineteenth Century." (F. Bowie, D. Kirkwood, and S. Ardener, ed., *Women and Missionaries: Past and Present*, 1993), Steven S. Mangham, "Civic Culture, Women's Foreign Missions and the British Imperial Imagination, 1860-1914", p.204 (F. Trenchmen, ed., *Paradoxes of Civil Society*, 2000)

(三) Elizabeth Langland, *Nobody's Angels*, 1995.

(四) ブラム・ダイクストラ、富士川義之他訳『倒錯の偶像』バ

ビルス、一九九四年。

(五) Mangham, op.cit., p.214. 次も参照。河村貞枝「イギリスヴィクトリア期のフェミニズムと帝国主義」(田淵康子他編『ジェンダーと女性』早稲田大学出版部、一九九七年)。

(六) P. Williams, op.cit., pp.63-66.

## 二、リトル夫人と反纏足運動

ここでリトル夫人の生涯について簡単に紹介し、彼女が主導した反纏足運動を見て行こう。冒頭で紹介した『大英帝国歴史事典』によれば、リトル夫人は一八四五年に生まれ、一八八六年にリトルと結婚するが、それまでに数冊の小説を刊行し、一八七〇年代、八〇年代には伝染病法反対運動、既婚女性財産法制定運動、女性参政権運動に積極的に関わった。結婚後、一八八七年に中国に渡り、中国に関する数冊のノン・フィクションを発表するとともに、一八九五年には纏足に反対する協会を創設し、その会長として反纏足運動を指導し、纏足反対運動を軌道に乗せるのに成功した。<sup>7)</sup>

このようにリトル夫人はきわめて多様な才能を持った女性だが、これまではもっぱら反纏足運動に関してのみ評価されてきた。したがって彼女の才能をこのように限定して評価することが妥当かどうかという問題が生じるが、行論の都合上ここではこの問題には立ち入らず、ここでもリトル夫人の反纏足運動に焦点を絞りたい。この点についての最初の情報は、

既に紹介したように『シニカ』である。英語圏の纏足研究の古典ともいべきレヴィの著書では、リトル夫人は反纏足運動の有力なメンバーとして紹介されている。<sup>2</sup> 中国を旅行した西洋の人々の軌跡を跡づけたキヤメロンは、一章を割き、リトル夫人の反纏足運動の紹介にあて、リトル夫人は「男性社会が快楽のために強要していた不浄な拷問のシステム」を変える機会を待っていた中国の女性たちに火を付けたのだと評価した。<sup>3</sup> ケンブリッジ版中国史は、女性解放の一環として反纏足運動を扱い、リトル夫人が会長を務めた天足協会が、リトル夫人をリーダーとして広範な宣伝活動を展開し、反纏足運動に重要な貢献をしたとする。<sup>4</sup> スポーツ史の観点から纏足を研究したファン・フォンは「英国人女性で、反纏足運動の指導的存在だったリトル夫人」と紹介している。<sup>5</sup> 清朝末期の女性解放運動を論じた夏曉虹は、反纏足運動を論じた箇所ので、「一八九五年、長年重慶に住んでいたイギリス人リトル夫人の提案で「天足会」が成立した」と、リトル夫人に触れている。<sup>6</sup> このように、リトル夫人は反纏足研究の分野ではその指導者としてよく知られた存在であったといえる。

では次にリトル夫人の反纏足運動について改めてみていこう。そもそもリトル夫人はどうして纏足運動を始めることになったのか。彼女の動機について、テューリンは夫の影響が大きいとするリトル夫人自身の説明に疑問を感じていないようである。<sup>7</sup> リトル夫人の伝記を著したクロールも夫の影響を重視している。クロールは、リトル夫人が反纏足運動を展開

た表情をしていることに衝撃を受ける。そして、「ヨーロッパの男性の頬が永遠の若者のようにピンクに染まっているのに、どうして彼女たちは色あせているのか」と自問する。彼女は、芝罘に来て理由が分かった、という。中国の英国人レディは、華氏九〇度にもなるこの地で、華氏六〇度のハイドパークへでも出かけるように、腰を締め付け、スエードの手袋をしている。さらに、彼女たちのかなりの人々がロンドンテニスもしないし、乗馬もしない。その一方で、男性たちは歩き、ボートをこぎ、水泳をし、射撃をし、クリケット、テニスをしているのである (BBC13)。

この部分は中国の纏足問題とは直接的には何の関係もない。だが、こうした観察はリトル夫人の纏足反対運動の動機を考えるとき無視できないものである。

さて、漢口での纏足反対のためのレディの集まりにおいてリトルは、次のような体験をする。この集会には、深紅の上品な金欄を身に付けた中国人レディたちが集まったが、その中でもっとも美しく着飾ったこの地の有力一族の娘が、纏足で走ったり、ジャンプしたりできると主張し、実際にして見せた。この時リトル夫人は次のように感想を洩らす。「だが、生命力を一杯持ちながら、自然のはけ口をほとんど閉ざされている少女の抑圧されたエネルギーのことを想い身震いした」 (BBC296) 等。

ここにこそリトル夫人の反纏足運動の根本的な動機が吐露されている、と思われるのである。つまり、女性が、人間が

するに際しての夫の存在の重要性を強調し、彼女がいかに夫を頼りにしていたかを示す一節を典拠を示さず引用している。<sup>8</sup> だがクロールが引用し、またテューリンも一部引用した、「反纏足運動を始めるに当たり、彼に多くを負った」で始まる一節は夫の死後リトル夫人が編集し、出版した夫リトルの著書に寄せた彼女の一文に見られる一節である。リトル夫人は、夫を間違いなく尊敬しており、その気持ちを表すのに何の躊躇もなかった女性だったといっている。したがって、夫の著書にその気持ちを十分すぎる以上に表現しても不思議ではない。つまり、この一節をあまり額面通りには受け止めない方がよいということである。リトル夫人が自らの反纏足運動について語った一八九九年に刊行された『わたしの見た中国』<sup>9</sup>と一九〇一年に刊行された『ブルー・ガウンの大地』<sup>10</sup>の諸章には夫リトルは全く登場しない。反纏足運動は、リトル夫人ら女性を中心になって展開されたように記述されているのである。もちろん、夫リトルの影響を全く認めないなど言うのではない。それをある程度認めること自体に問題はないとしても、それだけで彼女の動機を説明したことにはならないだろう。そして、この動機が説明できなければ、リトル夫人の中国での反纏足運動が英国女性にとって有した意味も解明できないであろう。

では、これらの著作によって動機を探ってみよう。まず、リトル夫人の中国にいるヨーロッパ女性についての観察を見ておきたい。彼女は、中国にいるヨーロッパの女性が疲れ切った意味も解明できないであろう。それは、彼女が夫の中国での反纏足運動が英国女性にとつて有した意味も解明できないであろう。

では、これらの著作によって動機を探ってみよう。まず、リトル夫人の中国にいるヨーロッパ女性についての観察を見ておきたい。彼女は、中国にいるヨーロッパの女性が疲れ切つた意味も解明できないであろう。

本来持っているエネルギーを生かせずに、不当にそのエネルギーを抑圧され、狭い空間に閉じこめられることへの深い、静かな怒りである。ヨーロッパの疲れ切った表情の女性たちへの反応も根は同じはずである。こうした静かなリトル夫人の怒りは、リトル夫人に纏足のレディと彼女に付き添う女性とを、よろめきながら歩くピグミーと女主人よりも頭一つ高い「たくましい別の人種」のように見えるアマゾネスに喩えさせ、こうした光景を見ることが反纏足の「レクチャーへの教材」だといわせる (BBC290)。

以上は『ブルー・ガウンの大地』での観察だが、『わたしの見た中国』でも同様なリトル夫人の怒りを見いだすことができる。纏足される中国の少女についてリトル夫人は次のように述べる。「イングランドの少女のようにバラ色の頬を膨らませてホップしたり、スキップしたり、ジャンプしたりするのではなく、この哀れな小さな私たちは the poor little things. 彼女たちよりも長い棒に苦しげに寄りかかるか、男性に背負われるか、あるいは座ったまま悲しそうに泣いているのである。・・・少女が得る唯一の慰めはアヘンか、木製の寝台の端に足を載せて血流を止めるかである」 (C139-140)。

「この哀れな小さなものたち」という表現は、中国人への蔑視とも受け取られかねないが、ここではリトル夫人の怒りの深さを表すものと受け止めるべきだろう。リトル夫人の怒りは、しかし纏足にだけ向けられていたわけではない。纏足の少女に慰めをもたらすアヘンもその対象である。少々長い

が次の一節に注目したい。

「野良仕事をしたり、水運びをする最貧層を除けば、中国の女性は子供に授乳し、靴を作る以外にほとんどなにもしない・常習のアヘン吸飲者のレディたちは深夜まで夜更かしをし、夕方の五時か六時まで起きてこない。彼女たちは大部分が健康を害しており、そのためにアヘンを吸飲するようになったと一般にいわれている。・彼女たちは、イングラントでレディたちがワインについて語るのを恥じないのと同じくらい、このことを恥じるどころがないようである。しかし、アヘンを吸わない人々は、そのことを恥すべきことだと考えているようだ。・・・ところが、かなり多くの晩餐会で、エレガントなアクセサリーを一式備えたアヘン吸飲用のカウチが準備されているのである。」(C17&179)。

リトル夫人は、纏足がアヘンに溺れる何もしない怠惰なレディたちを産み出したと考えていたようである。もちろんすべての纏足の女性がアヘンに溺れたわけではないであろうが、アヘンの脅威が相当深く中国人のレディの間に浸透していたことは間違いなさそうである。ともあれ、こうして纏足とアヘンが結びつけられることになる。それらはともに撲滅されねばならぬ。「最悪の呪い」(C143)であり、ともに撲滅されねばならない。リトルにとっては緊急の課題は反纏足であり、「もう一つの呪い」(C143)、アヘンの一掃は纏足から解放された中国の女性たちに託されることになる (LBG304)。

動機はこれくらいにして、リトル夫人の始めた反纏足運動のである。そこで、リトル夫人たちもおそろ運動を始めたということになる。だが、彼女たちの運動は大胆かつ果敢であった。「シニカ」は反纏足運動を次のように紹介している。

「この団体（天足協会）は、直ちに満州人であるために纏足していなかった西太后に請願書を提出することを決めた。この請願書は、英語で注意深く起草され、中国語に翻訳された後に、極東のほとんどすべての外国人レディの署名がなされた。・・・これは宮廷に届いたと信じられている。しかし西太后が一九〇二年に発布した反纏足の勅令は、首都にいる外国人レディの支持を得るためのものであっただろう。この協会はすべての総督や巡撫に請願書や手紙を送り、各地で集会を開き、協会の会長が多くの中国人聴衆に演説をした。これは当時にあつてはきわめて革新的な出来事であった。上海からだけでも一〇〇万以上のパンフやプラカードが送られた。他の五つのセンターからも大量に送られた。帝國中に多くの支部が設置された。上海に非キリスト教徒の天足の中国人の少女のための学校が開設された。あらゆる方法で世論を啓蒙しようとした。一八九六―一八九八年の改革運動期には、康有为が広東に不纏足を設立し、まもなく一万人を越す会員が集まり、戊戌の政変後は会は上海に移った。中国中に多くの小さな会が設立された。これらが天足協会にどれほど直接的に影響を受けたものかはわからない。結局、すべての総督と巡撫が反纏足令を発布した。・・・天足協会は一九〇六年に最

についてももう少し見ておこう。リトル夫人は、この運動を始めた頃の様子を次のように述べている。

「一八九五年四月わたしは幸運にも天足会 'T'ian Tsu Hui', Nautual Foot Society をスタートさせることができた。この時まで、宣教師でない外国人は、纏足を阻止するために何もできなかった。だから、わたしが働きかけた在上海の相当数に上るすべてのレディが、この委員会に喜んで、そして熱心に参加してくれたのは、望外の喜びであった。私たちはおそろおそろ中国人レディの書いた詩を再刊することから始めた。・・・」(C149)。

リトル夫人がいかにも緊張した面もちでこの運動を始めたことがよくわかるであろう。

一八七五年にロンドン伝道会の信徒が中国最初の反纏足組織を旗揚げし、一八八三年には康有為が短命に終わった不纏足を創設してはいたが、この頃の纏足反対運動が盛り上がったいたとは到底言えなかった。<sup>1)</sup>「シニカ」はこの頃の状況を次のように説明している。

「中国人の少女は、たとえキリスト教徒の家族でも、大多数がなお纏足をしていたし、一八九五年に一〇人の国籍の異なるレディがリトル夫人を会長として天足協회를設立したときには、非キリスト教徒の中国人はこの新しい觀念に触れたことはなかったであろう。纏足を廃止するという觀念は、この当時なお「新しい觀念」だったのである。つまり、この当時反纏足は運動としての広がりをほとんど持っていなかった終号となる第一〇号の報告を発行した。協会は一九〇八年に中国人レディの委員会に引き継がれ、まもなく機能を停止し、中国人の創設した諸協会が取って代わった。天足協会は中国での反纏足の世論形成にきわめて重要な貢献をした」<sup>2)</sup>。

ここで反纏足運動は、ほぼリトル夫人の天足協会を中心に語られているが、これはこの記事の主要な参考文献のひとつがリトル夫人の『わたしの見た中国』だからである。こういう意味では、この記事は反纏足運動全体についての記事としては多少問題ありということになるが、リトル夫人の活躍の跡を知るには問題ない。リトル夫人は、この記事から窺いしれるように八面六臂の活躍をしたといえる。冊子などの配布によって大量の纏足反対に関する情報を流すとともに、自ら先頭に立って中国各地（漢口、広東、香港、マカオ、廈門など）を巡回し、反纏足集会を開催し、自らスピーチを行い、さらには李鴻章などの多くの中国の有力者と会談し、纏足の廃止を訴えた。その結果、中国社会は大きく反纏足へと向かうことになった。先に述べたように、この運動への『シニカ』の評価には史料上問題があるが、リトルの天足協会が重要な役割を果たしたについては、既に見たようにほとんどの纏足・反纏足研究が認めるところである。

註(1) J.S. Olson & R. Shadle (eds), op.cit., pp.673-675.

(2) H.S. Levy, *Chinese Footbinding: The History of a Curious Erotic Custom*, 1967, pp.65-80.

- (3) N. Cameron, *Barbarians and Mandarins: Thirteen Centuries of Travellers in China*, 1970, pp.361-370.
- (4) J.H. Fairbank and D. Twitchett, ed., *The Cambridge History of China*, 1976, vol. 11, pp.582-583.
- (5) Fan Hong, *Foinbinding, Feminism and Freedom: The Liberation of Women's Bodies in Modern China*, 1997, pp.55-57.
- (6) 夏曉虹、清水・星野訳『纏足をほぐした女たち』朝日選書、一九九八年、二二―二二頁。
- (7) Susan Schoenbauer Thurin, op.cit. p.183.
- (8) Elisabeth Croll, op.cit. pp.60-61.
- (9) Mrs. Archibald Little, *Intimate China: The Chinese as I have seen them*, 1899. (reprint) 以下において本書はICと略記し、本書の引用は本文中に示す。
- (10) Mrs. Archibald Little, *In the Land of the Blue Gown*, second ed., 1908. 以下において本書はLBGと略記し、本書の引用は本文中に示す。
- (11) 夏、前掲書、二〇―二三頁。
- (12) *Encyclopaedia Sinica*, pp.29-30.

### 三、ヴィクトリア朝社会と反纏足運動の意味

前章に見たように『シニカ』は、リトル夫人が多数の中国人聴衆を前にして演説したことを、「きわめて革新的な出来事」と述べていたが、リトル夫人の「革新的な出来事」はこれに留まらない。李鴻章のような男性有力者と会談を行った

の挑戦は容易ではなかったのである。第二章では主として宗教界の様子を見たが、世俗の男性たちが宗教界の男性に比べて女性のリーダーシップにより寛容であったというわけでもない。シヨウオールターが指摘したように、男たちは、そして時には女たちもジェンダー、人種、階級の境界線が揺らぐ「性的アナキー」の時代に、それまでの境界線を必死に防衛しようとしたのである。さらに、帝国は、国内の政治文化に強力に逆らい、人民的民主主義、フェミニズム、女権へと向かう時代に、英国の政治文化にヒエラルキー、ミリタリズム、男性的市民文化を持ち込んだのである。

『シニカ』が革新的だと評したりトル夫人の中国人聴衆を前にしての演説だが、そこには女性だけでなく、男性もいた。リトル自身の説明によれば、中国人の高級官僚も足を運んだという。こうした男女が混じり合った聴衆を前にしての女性の演説は、英本国でも希だったのであり、男女が席を同じくする大聴衆相手に女性が演説することが初めて普通になったのはヴィクトリア時代の女性参政権運動中においてであった<sup>4</sup>。とするならば、リトル夫人は英本国でも女性にようやく認知されたばかりのプロバガンダの方法を中国において大胆に採り入れ、運動を展開したのだということになろう。

女性が一貫してリーダーシップを取る運動も、やはり英本国でもそう簡単に認められたわけではなかった。一八六四年に制定され、六六年、六九年に拡大修正された伝染病法は、結局一八六六年に撤廃されることになった。このキャンペー

こともきわめて革新的だったはずである。実際、リトル夫人が広東で李鴻章と会談を行うに当たり、英国総領事に紹介の労を執るように要請したが、総領事はまるで取り合わなかったのである（LBG258）。会談は、イタリア総領事の尽力で結局実現したのだが、このエピソードも彼女の行動が革新的であったことの証左であろう。また、リトルがこうした形でヨーロッパの男性や中国人男性を巻き込みながら、運動を展開していったことも革新的であったと言えよう。そしてまた何よりも、女性が一貫してこの運動のリーダーシップを取ったことも革新的だったと言えよう。

だが、こうしたリトルらの運動は、この当時の英国においても、多かれ少なかれ革新的と評されたであろう。経済的に無力だった既婚女性に財産権を認めた既婚女性財産法が一八八二年、女性に親権を認めた幼児保護者法が一八八六年、伝染病法の撤廃がやはり一八八六年。このように、この時代は英国において確かに女性の地位が一定程度高まり、伝染病法反対のジョセフィーヌ・バトラーや、女性参政権運動のミリセント・ガレット・フォーセットなどが華々しい活躍をした時代であった。だが、一九世紀中に女性に参政権が認められる見込みは全くなかったし、一八九七年時点でイングランド中の大学を合わせても女性の数は八四名にすぎず、やはりイングランドでの女医の数は八七名でしかなかった<sup>1</sup>。英本国においてもなお女性の活躍には厳しい枠があり、第二章で見たとように、「男性の指導権」、男性のヘゲモニーへの女性たち

ンで中心になったのがともに一八六九年に結成された「伝染病法撤廃のための全国協会」と「伝染病法撤廃のためのレディの全国協会」であった。後者を率いたのが伝染病法を「すべての貞節な女性の尊厳への攻撃」と断じるジョセイフィン・バトラーであった。この運動全体が「ジョセイフィン・バトラーのキャンペーン」と評されるように、バトラー率いる「レディの全国協会」はこの運動の成功にきわめて重要な役割を果たした。だが撤廃賛成派の男性の中にさえ、男女混合の集會に反対したり、女性が運動のリーダーシップを取ることに嫌悪感を持つ者もいたのである。こうした状況の中で、「レディの全国協会」は、「全国協会」と併合し男性のヘゲモニー下にはいることを拒否し、女性だけで資金を集め、組織運営を行ったのである。リトル夫人は、ここでも英本国で女性にようやく切り開かれた方法を、中国で大胆に展開したことになるだろう。

女性のリーダーシップも革新的だが、そもそも纏足を取り上げたこと自体やはり革新的だったと言えるだろう。これについてリトル夫人は、「足は中国ではきわめてきわどい主題であり、これほど不適切な主題はないことをわれわれはもちろん知っており、思い悩んでいた」(C750)、と述べている。ここでは「中国では」と限定されているが、こうした事情は上辺を取り繕うことに汲々としていたとされるヴィクトリア朝英国でもさほど変わらなかつたはずである。というのも、伝染病法廃止などの運動によって女性が性的な問題を公的に口

にすることが不適切で、危険だという因習的通念を打破したとされるのがようやく一八八〇年代であり、しかもこの打破にも自ずと限界があったと思われるからである。キャメロンは、リトル夫人は、「中国の家族制度の中で女性の哀れな地位」について気づいていなかっただけでなく、「纏足が直接的に性的な意味を持っていた」ことにも気づいていなかったという。<sup>6)</sup> いずれの指摘も的を射ているとは言えないが、ここではわれわれのテーマに直接関連する後者の点についてみておく。<sup>7)</sup> 先の引用で知れるように、程度の問題でもあるが、リトル夫人が纏足の性的な意味について全く知らなかったとは言えないであろう。だが、ここで重要なのは、キャメロンは纏足の性的意味を知っていたればリトル夫人はこの運動を起こさなかったであろうと示唆しているのだが、たとえリトル夫人がその性的含意を十二分に知っていたとしても、やはり纏足を取り上げることを止めなかったであろう、ということである。なにしろ、リトル夫人は直接的に性に関わる伝染病法に関わっていたのである。結婚前の英本国での伝染病法反対運動での経験、それに関わった自負が「中国では」と言わせたのであろう。とすれば、この「中国では」という限定的言辞は、リトル夫人だからこそのものだともいえる。後に優生学者として名を馳せるロンドン大学教授カール・ピアソンや『南アフリカの農場の物語』で一躍有名になっていた小説家オリーブ・シュライナーらのその当時のもっとも先端的な男女によってセクシュアリティについての最も重要な議論が

たようである。この協力は英国人レディだけに限られてはいなかった。リトル夫人の天足協会が西太后の支持を得る目的で反纏足の覚書を起草したとき、極東のほとんどすべての外国人レディが署名したのである。男性の方では、中国人男性は李鴻章にまで働きかけているのだが、ヨーロッパ人男性も概して協力的だったと言えそうである。リトル夫人の著作には、李鴻章との会談の際の英国総領事とのエピソード以外にヨーロッパ人男性が非協力的だとするような指摘は見あたらない。

さてでは、こうしたリトル夫人の「革新的な」中国での活躍をどう理解すればよいのであろうか。リトル夫人は、英本国でなお強い「男性の指導権」への信仰からほぼ完全に自由に中国で羽ばたけたのだと言つてよいであろう。リトル夫人は、李鴻章のような政府側の要人と会談できただけでなく、改革派の中国人ジェントルマンたちから招待を受け、相談に乗つてもいるのである (C564)。とすれば、中国はリトル夫人にとって自らのエネルギーを抑圧されることなく存分に生かせる格好の舞台であったことになるだろう。そうであれば逆に、英本国に戻ったとき、リトル夫人は、自らのエネルギーを強く制約されるように感じたであろう。リトル夫人は一九〇六年に帰国するが、一九〇八年に女性に参政権を付与するのは当然だとする一文を『タイムズ』に投稿する。その文章の端々に、中国で自由に羽ばたいてきたが故に、抑圧にあえぐようにしか見えない英国の女性たちへの憐憫の情が、

なされたとされる、一八八五年に創設された「男女協会 Men and Women's Club」が市民権を獲得することなく、一八九九年に解散したことに示されているように、性的問題を語ることにしているの因習の打破は、なお限られた範囲のものであったからである。<sup>8)</sup>

リトル夫人は、本国から遠く離れた中国で、最初こそこわごわだったが、まもなくきわめて大胆に運動を展開していった。まさに怖いものなしである。『わたしが見た中国』、『ブルーガウンの大地』での反纏足運動についての記述を読む限り、概して実に堂々と運動を展開していたとの印象を強く受ける。例えば、李鴻章との会見である。纏足の話題を避けようとする李鴻章に対し、慎重に機会を窺い、遂に「小さな子供が纏足のために叫ぶのを聞きたくはない」という発言を引き出し、さらには、李鴻章がリトル夫人らの運動を承認している印として彼の書を所望する。彼は、この要請に応じ、彼女の扇子に一筆認めた。リトル夫人は、この李鴻章の書を最大限有効に活用する。彼女は、この書をあらゆる反纏足集会で掲げ、人々を反纏足へと誘導するのに利用し、大いに成功する (JBC526)。また、リトル夫人はこの運動に様々なヨーロッパと中国の有力者を取り込んでいくが、既に述べた李鴻章との会談の際の英国総領事の例はあるが、こうした人々の動員にさほど苦労していないように見える。まず女性たちが、香港総督の夫人を始め、植民地行政官の妻、あるいは海軍将校の夫人など多くの英国人レディが率先して協力してい

そしてそうした状態に英国人女性を陥れている英国人男性への静かな怒りが満ち満ちている。イングランドの女性たちが、彼女らが何らかの罪を犯したが故ではなく、ただ単に女性であるというだけで参政権がないという「生存闘争でのハンディキャップ」を負わされている状態を「火星人」に次のようにコメントさせる。「確かにあなたは誤った情報を得たに違いありません。……夫を亡くすという悲劇に遭遇しながらも、彼女の細腕で子供を育ててきた女性が、税金を支払わねばならず、しかも彼女を代弁し、彼女の利益を監視するための議員を選ぶ投票権を行使してはならないことになっている。こんなことはありえません」と。この場合「火星人」とは中国からやってきたリトル夫人のことだと言つてもよいだろう。さらに、リトル夫人は、英国人男性が女性をこうした状態に貶めていることを、「男らしさにとつての不名誉」だと断罪する。<sup>9)</sup>

このような英国人女性の非ヨーロッパ世界の女性解放の仕事について、実は非ヨーロッパ世界の女性ではなく、むしろ英国人女性自身を解放する手段だったのだという指摘がある。<sup>10)</sup> これはおそらくそれほどのはずれな指摘ではない。この時代の多くの英国人女性の非ヨーロッパ世界の女性解放の仕事に、こうした側面を見いだすことは十分可能である。例えば、インドでの伝染病法撤廃に貢献したミドルクラスの英国人女性について、A・バートンは、彼女たちの大部分のものが「インド女性の大義」を第一義的に考えていたのではなく、

むしろその大義を彼ら自身の安全を保証する手段と考えていた、と述べている。<sup>11)</sup>では、リトル夫人は、自らを、いや英国人レディたちを解放することを第一義的に考え、中国人レディたちを解放しようとしたのであろうか。おそらくそうではない。リトル夫人がこの反纏足運動を指導しているとき、何よりも中国人女性の解放を第一に、というよりもそれだけを専ら考えていたと言つてよいだろう。リトル夫人が纏足運動を指揮しているとき常に念頭にあったのは、中国の少女たちが一刻も早く纏足を解き放ち「イングランドの少女のようにバラ色の頬を膨らませてホップしたり、スキップしたり、ジャンプしたりする」ことであつただろう。リトル夫人の英国での女性参政権に関する論考を産み出したものは、中国などよりも遙かに自由で、社会的地位も高いと考えられていた英国のレディたちの地位が、中国での反纏足という女性解放運動に中心的メンバーとして自由奔放に活躍する中で、中国の女性と比べれば遙かにましとはいえ、なおきわめて不十分なものを見てきたことによる怒りであろう。「長くイングランドを留守にしてきた」者であるが故に、英本国での不合理さが一層鮮明に見えてきたということなのである。中国で発見し、身震いした「抑圧されたエネルギー」をあるう事か英国内でも発見してしまつたともいえよう。リトル夫人は、一八九八年に『スペクテイター』に匿名で「中国での社会革命」と題する論考を寄稿している。それは自らが指導した反纏足運動が中心になつて引き起こしつある中国での社会的変化

とはいえ、リトル夫人が帝国主義に関して無罪放免というわけにはいかないことも明らかであろう。パートンの言うように、この時代の多くの英国のミドルクラスのフェミニストは、非西洋世界の女性を、対等な者と見なさず、彼女らが救うべき不運な女性、無力な従属民と捉えることで彼女ら自身の進歩の引き立て役として利用した。<sup>12)</sup>リトル夫人が反纏足運動を指導しているとき、彼女も中国人女性を彼女が救うべき不運な女性と見なしていたことは明らかである。また、纏足の女性についての記述そのものが、中国の野蛮さとそんな習慣など考えられもしない英国社会の進歩・文明を強調することになつたであろう。何よりも、英国人であるリトル夫人が大英帝国の中国でのプレゼンスを正当化することになつたであろう。だが、彼女に対し「母性的帝国主義者 Maternal Imperialist」などというラベルを貼ることは困難であろう。この母性的帝国主義者の定義は必ずしも明確ではないが、非ヨーロッパ世界の女性解放の主要な手段は帝国統治であるとの確信を持ちつつ、非ヨーロッパ世界の人々の母としてその解放に従事する英国人女性ということのようである。<sup>13)</sup>リトル夫人は、香港は別にして、精々非公式帝国でしかなかった中国を舞台にして活躍したということもあるが、彼女が依拠したのは大英帝国の威光ではなく、情理を尽くした宣伝活動であつた。その際威力を発揮したのは、既に述べた李鴻章の書であつたり、あるいはこれまで纏足の女性に同情してきたが、

を報告したものであるのだが、その中で、「外国人女性と中国人女性が親密になりつつある」ことをこうした変化の一つの兆候としてとくに取り上げ、「おそらくこれは両者をもとに向上させるだろう」と述べている。<sup>14)</sup>『わたしの見た中国』には、一八九七年秋に中国人レディたちから、中国の若いレディのための高等教育を行う学校の設立に関して、リトル夫人らがデイナー・パーティの招待を受けたことが記録されており、これについてリトル夫人は「このデイナーは、これまでになつた外国人レディと中国人レディとの心のこもつた交際 interchange of civilities の始まりであつた」(CS53)と述べている。『スペクテイター』の論考は明らかにこの体験をふまえたものである。「これは両者を向上させるだろう」と述べたとき、リトル夫人の胸中にはあるいは中国人レディのことしかなくなつたのかもしれないが、リトル夫人も反纏足運動を通じて、そしてそれに関連して中国での女学校建設に関わる中で、確かに向上したのである。こうした中国での体験が、リトル夫人に自信を持たせ、また英本国での不条理を真正面から断罪させる強さを涵養したのである。つまり、リトル夫人は、中国での運動を通じて、自らを向上させ、いやまさに男性の高みにまで自らを高め、その体験を英本国での女性解放にさらに生かそうとしたのである。こうした意味でリトル夫人は間違いなくフェミニストと呼べるであろうが、この時代の他の多くのイギリスの母性主義フェミニストたちとは区別されるべきだろう。

リトル夫人らの運動が展開されるまでその思いを公にできなかったとする孔子の直系の子孫による告白などであつた(CS16)。そして、彼女は歴代皇帝が發布してきた纏足禁令を有力な根拠に、「人々が知性的で、賢明になり、この愚行を捨てざることを願う」と訴えたある中国人知識人の主張を、「それは英国的な書き方ではないけれど、中国人の心に強く訴えるものがある」(CS16)、と率直に認めていた。このような意味では、リトル夫人は中国の男性有力者を頼る傾向があつたとは言えるだろうが、中国の人々がリトル夫人の背後に感じたであろう大英帝国の威光を利用して運動を展開しようとしたとはいえないだろう。また、リトル夫人は、ある意味では中国人女性の方が英国人女性よりも大きな権限を持つていると考えていた。彼女は、夫リトルがビジネスに際し、取引相手の中国人商人に「家に帰つてこの件について妻と相談しなければ結論を出せない」というせりふを聞かされるのが珍しくなかつたことを、またある中国人商人の妻が、「外国人のレディは、われわれのレディとは違う。彼女たちはビジネスについて何も知らないし、夫のビジネスに何ら関与していない」と呆れていたことも素直に記録している(CS17)。このようにリトル夫人は、ただ中国人女性を見下し、救済を待つ哀れな犠牲者とだけ見ていただけとは言えないし、纏足からの解放後に中国人女性にリトル夫人が期待したのはアヘンからの解放の先頭に立つことであり、彼女たちにヴィクトリア時代のジェンダーイデオロギーを押しつけ



ようとしたとも言えないであろう。したがって、やはり彼女に「母性的帝国主義者」のラベルを押しつけるのは無理があるだろう。

- 註(1) E・シウォールター、富山太佳夫他訳「性のアナキー」みすず書房二〇〇〇年、一一頁。
- (2) 同書。これがシウォールターの主題である。
- (3) Harris, op.cit., p.6.
- (4) Colin Matthew, *The Nineteenth Century: The British Isles, 1815-1901*, 2000, pp.176, 188.
- (5) 荻野美穂「性の政治学」、草光・近藤他「英国を見る」リポポート、一九九一年；S. Mitchell (ed.), *Victorian Britain, 1988*, p.108.
- (6) N.Cameron, op.cit., p.365.
- (7) リトル夫人は、もし中国人の男性と結婚する場合は、英国人の少女は義理の母の召使いとなることを覚悟しなければならぬ(OC210)などと述べており、中国女性の哀れな地位を知らなかったとは言えない。
- (8) シウォールター、前掲書、八五―八八頁。
- (9) *The Times*, 24 Feb. 1908
- (10) Jane Haggis, "White women and colonialism", C. Midgay (ed.), *Gender and Imperialism*, 1998p.65.
- (11) Antoinette M. Burton, "The White Woman's Burden", (N. Chaudhuri & M. Strobel, ed., *Western Women and Imperialism*, 1992), p.141.

女性化とは、「支配者のヒエラルキー内部に劣等者として位置づけられた者のオリエンタリスティック的観点」からオリエントを見ることだといえる。<sup>2)</sup> こうした指摘は、この時代の多くの帝国に居た女性たちの現地的女性への眼差しについては大きくははずしていないように思われる。だが、こうした指摘がどこまでリトル夫人に当てはまるであろうか。彼女は、英本国では「劣等者」であることを痛切に感じていたであろうが、少なくとも中国では「劣等者」を超える立場を獲得していた。そもそも彼女はどこまでオリエンタリストであったといえるのであろうか。彼女がなしたことは「ジェンダー化された戦略」を中国の表象に用いることで、サイドのオリエンタリズム論を厳しく批判したマッケンジーの言う「他者性」の理論ではなく、「文化的相互参照の理論」という議論、あるいはオリエンタリズムの複雑さや不安定性を説く議論を裏付けたのだといえるのではないだろうか。<sup>3)</sup> リトルは『ブルーガウンの大地で』のなかで、次のようなある英国人男性の言葉を引用する。「中国人は、英国人が中国人をキリスト教化したよりももっと英国人を異教化してきた」。<sup>4)</sup> そしてこのような事例として、中国ではレイデイが日曜日にピクニックに行くことが例外ではなく、ルールになっていることをあげる。リトル夫人は、こんなことは中国に来るまで聞いたことにはなかった、という。「異教化」は植民地に赴いた白人たちが非常に警戒し、そうならないように身を持っていた「原住民化 going native」の一つの重要な要素であろう。<sup>5)</sup> だが、「ロンドン

- (12) *The Spectator*, March 19, 1898. これまでこの投稿を取り上げたテューリンなどの研究者は、これをリトル夫人のものとしてずに、匿名のままに扱っている。だが、この論考はリトル夫人の手になるものと断定してよい。この投稿には、七ヶ月ぶりにイングランドから戻ったとの記述があり、その末尾に「上海にて一九九七年二月二〇日」とある。他方、「わたしの見た中国」には、一九九七年秋に中国に戻った、とある(351)。ここからもこの論考の書き手がリトル夫人である可能性が極めて高いと言える。さらに、この論考には孔子直系の子孫の「これまで纏足に反発を感じながらも、その気持ちを公にできなかったという告白が紹介されているが、この部分がほぼそのまま『わたしの見た中国』に引用されているのである(156)。
- (13) Antoinette M. Burton, op.cit., p.137.
- (14) N. Chaudhuri & M. Strobel, ed., op.cit., pp.8-9.

#### 四、おわりに―リトル夫人とオリエンタリズム

最後に若干の論じ残した問題を取り上げ、結びとしたい。リトル夫人は、オリエンタリズムを女性化することに成功したのであろうか。テューリンは、「オリエンタリズムを女性化すること」で、わたしが意味するのは、リトル夫人が女性的であり、かつフェミニニスティックでもあるジェンダー化された戦略を中国を表象するときに用いているということだ、と述べている。別言すれば、彼女のいうオリエンタリズムの

に、そして美学上、健康上、社会経済上の日々の偽善的言葉遣いに倦み疲れたわたしには、北京での逗留ほど元気づけられるものは考えられない」(36)、と述べるリトル夫人には、こうした「異教化」を本気で非難するつもりはなかったようにみえる。

また、リトル夫人は西洋の教会などが中国で、装飾を重視する中国人の趣味を無視して西洋様式の建物を押しつけることに反対しており、西洋の人々が中国人の習慣や趣味を尊重して病院などを建設している場合には大いに評価している(38)。「わたしの見た中国」では、「ひどく醜いヨーロッパ人の建物がそれを見るあらゆる中国人の審美的感情を害するに違いない」と述べている。中国人は「子供時代から建築における美の法則に慣れて」いるからだというのである(38)。

このように中国人の趣味や習慣を尊重できるリトル夫人には、中国人の態度や価値観を一方的に断罪する姿勢はない。「しかしながら、われわれがオリエンタルを真理の欠如の故に有罪宣告するとき、われわれ自身がいかに真理に遠いかを、そしてわれわれにショックを与えるものは、われわれがなじんでいるものとは別種の偽りなのだとこのことを認識しているのだろうか。・・・英国の商人は過去について嘘をつくことを悪いことだと考え、中国人は未来について嘘をつくことを悪くことだと考える」(OC206-207)。

リトル夫人はまた、粗野な人種主義が蔓延る時代にあつて人類の普遍的同質性の観念さえ持ち合わせていた。リトル

家は中国の農場でしばらく住んでいたことがあるが、そのときの日記の最後にリトル夫人は、「中国人と呼ばれる人類の大きなグループは、たしかに中国人からなっているのだが、同時にわれわれと変わることない単純な欲望と願いを持つ男女からなっているのだ」(LBGI97)、と締めくくっている。

以上のように、リトル夫人は単純に母性主義フェミニニストとも、母性帝国主義者とも、また女性版オリエンタリストとも断定できない。彼女はただ人間が、男であろうと女であろうと、本来持っているエネルギーを不当に抑圧されることなく発揮できる環境が整えられるべきだと信じて行動しただけであった。その際、彼女にそうした行動を可能にしたのは中国という舞台と、その中で運動によって涵養された強さによってであった。ここにオリエント＝中国の英国へのインパクトを見ることのできるだろう。オリエント＝中国が母性主義フェミニニストを超えるフェミニニストを育てたのである。

しかしそれにしてこれだけの女性がどうして『英国国民伝記事典』に載せられていないのであるのか。その一つの要因は、これまでの纏足研究の負の遺産だといえるだろう。その負の遺産を作った最大の責任者は、英語圏の纏足研究では、おそらく唯一の本格的な研究者といえる『中国の纏足 奇妙な恋愛の習慣』の著者レヴィである。レヴィは、様々な史料を用いて纏足の歴史を多角的に研究したとは言える。がしかし、彼の著書の副題が示唆するとおり、彼は纏足のもつエロチシズムをあまりにも強調しすぎた。彼だけではなく、彼の著書

に序文を寄せたイギリスの東洋学の泰斗アーサー・ウェーリーもそうであった。こうした纏足を専らエロチシズムに關連づける見方が、一般の歴史家に大きな影響を与え、彼らを纏足から遠ざけてきたことは間違いないであろう。纏足は、いわば際物として避けられてきたと言えるであろう。纏足を、そして反纏足運動をまともに扱うためにはこうした見方をまずは克服する必要があった。元来纏足は中国周辺の蛮族を文明化することさえ可能な「文」(文章、書、芸術、文学、文化、文明などを含む)概念の現れであったことを明らかにしたドロシー・コーや、纏足の女性が後期帝政期の家族を基礎とする生産制度を次第に統合した「ブテイ資本主義」を支える重要な労働力を提供したと主張するフレッド・ブレイクらの業績はレヴィの纏足研究の呪縛から解放されている。<sup>(6)</sup>こうした研究を導きの糸に、おそらくこれから纏足や反纏足運動の研究が歴史学会の中で市民権を得、その時、リトル夫人の名が一般の人名辞典に、そして『英国国民伝記事典』にも掲載されることになるだろう。

註(1) S.S. Thurn, op.cit., p.165.

(2) J. M. マッケンジー、平田雅博訳『大英帝国のオリエンタリズム』ミネルヴァ書房、二〇〇一年。

(3) 「原住民化」の恐怖については次を参照。H.L. Malchow, *Gothic Images of Race in Nineteenth-Century Britain*, 1996.

(4) H.S. Levy, op.cit. もちろん、レヴィの遺芳を継ぐ研究がない

わけではなく、レヴィのような観点からの纏足研究が無意味だなどというわけでもない。次を参照。Beverley Jackson,

*Splendid Slippers: A Thousand Years of an Erotic Tradition*, 1998.

- (5) ドロシー・コー、秦和子訳「中国・明末清初における纏足と文明化過程」『アジア女性史—比較史の試み』明石書店、一九九七年。次の文献も基本的に同じ観点から、纏足を包む靴を取り上げている。Dorothy Ko, *Every Step A Lotus: Shoes for Bound Feet*, 2001.

- (6) C. Fred Blake, "Footbinding in Neo-Confucian China and the Appropriation of Female Labor", *Sings*, 1994, vol. 19, pp.676-709.

- (7) 次の文献などはこうした成果の一つであろう。坂元ひろ子「足のデイスコース—纏足・天足・国恥—」『思想』九〇七号、二〇〇〇年。

(本稿は基盤研究(B)「近代欧米における「個」と「共同性」の関係史の総合的研究」友田卓爾代表の研究成果の一部である)

(金沢大学文学部)